

図書館ミニ講座
「佐久を知る」第2弾

佐久の先人を語る

～五郎兵衛新田と
中澤周三～

2021.06.26

小林 収先生

五郎兵衛記念館館長 根澤 茂

1. 佐久の、そして信州の農民のために 生涯を捧げた人『中澤周三』



- 誕生 明治40年(1907)
- 旧制野沢中学校を中退し上京
- 農業用水改良事業
- 国保浅間総合病院設立に貢献
- 佐久総合病院設立の人材育成
- 良き師と友に恵まれる
伊藤一明 和合恒男
安岡正篤 江渡狄嶺
- 文学の世界(荻原井泉水)

中澤周三追悼文集「竹溪のながれ」より

2. 多彩な師と友に恵まれていた生涯

(1) 中澤周三と伊藤一明

基礎研究シリーズ⑥

五郎兵衛と用水

— 改訂版 —

伊藤 一明



終生の友として用水
改善事業を共にした
伊藤一明とは、御牧
尋常高等小学校に入
学する頃に出会った。
以来、苦楽を共にし
た無二の親友となる。

(2) 中澤周三と和合恒男

大正10年(1921)、野沢中学校(現野沢北高校)に入学した中澤は、校風について校長と意見が対立するが互いに譲らず、三年生の春に学友数名と中退し上京する。

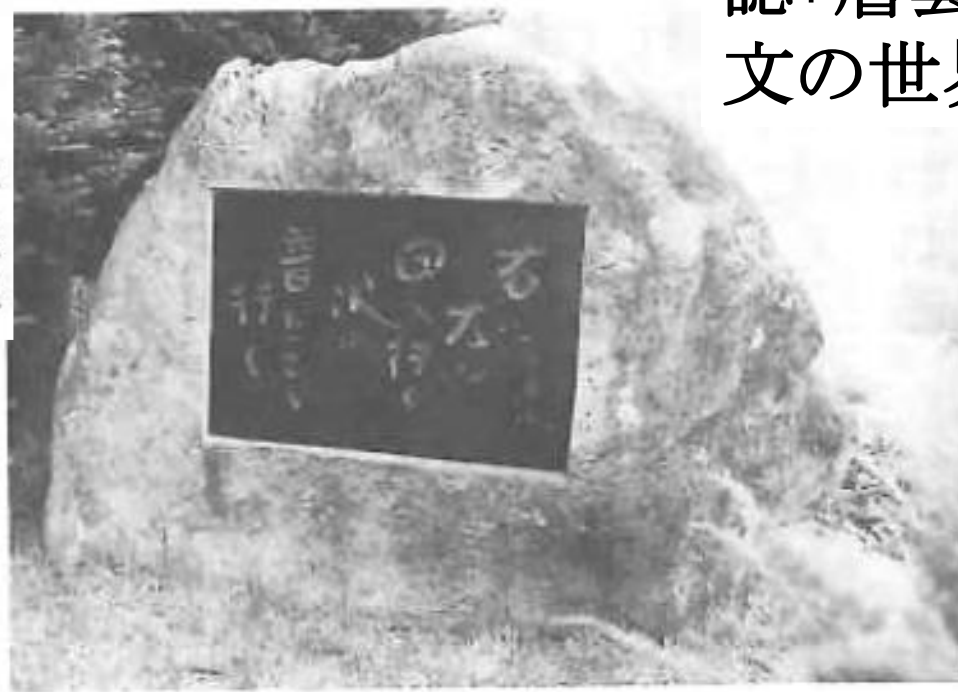
和合恒男は、大正12年4月から帝大(現東大)に籍をおく大学生のまま、野沢中学校(現野沢北高校)の教師となる。三年生の学級担任であった和合先生は、これに抗議して自らも退職してしまう。

以降、和合は多大な援助と指導を中澤に授けた。

(3) 中澤周三と荻原井泉水

荻原井泉水の門下に入り、俳号を普周として句作にはげみ、井泉水の主宰する句誌「層雲」で一位となるなど、文の世界にも秀でていた。

右に
左に
田へ行く
水の
音たてゝ
行く
井泉水

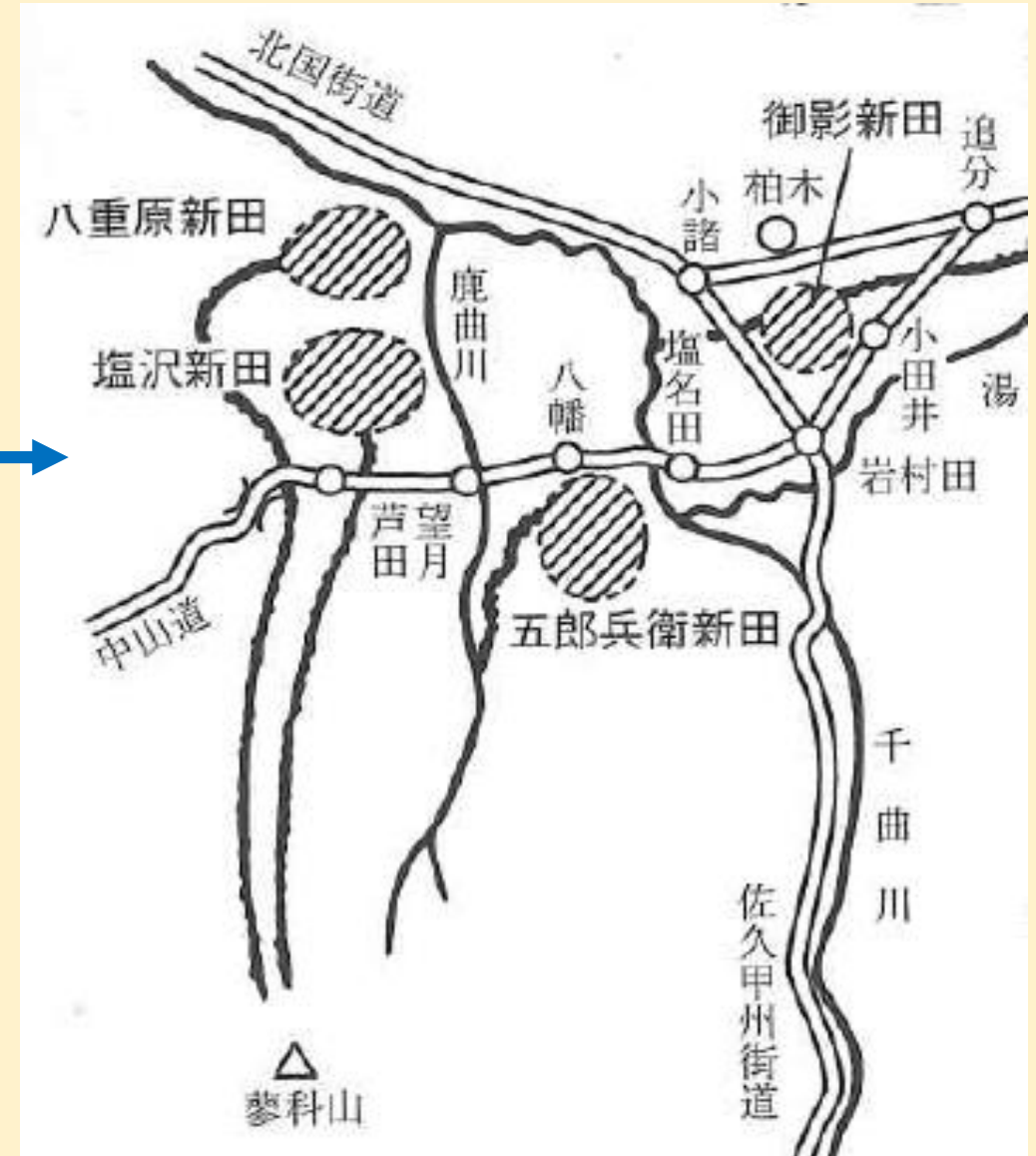
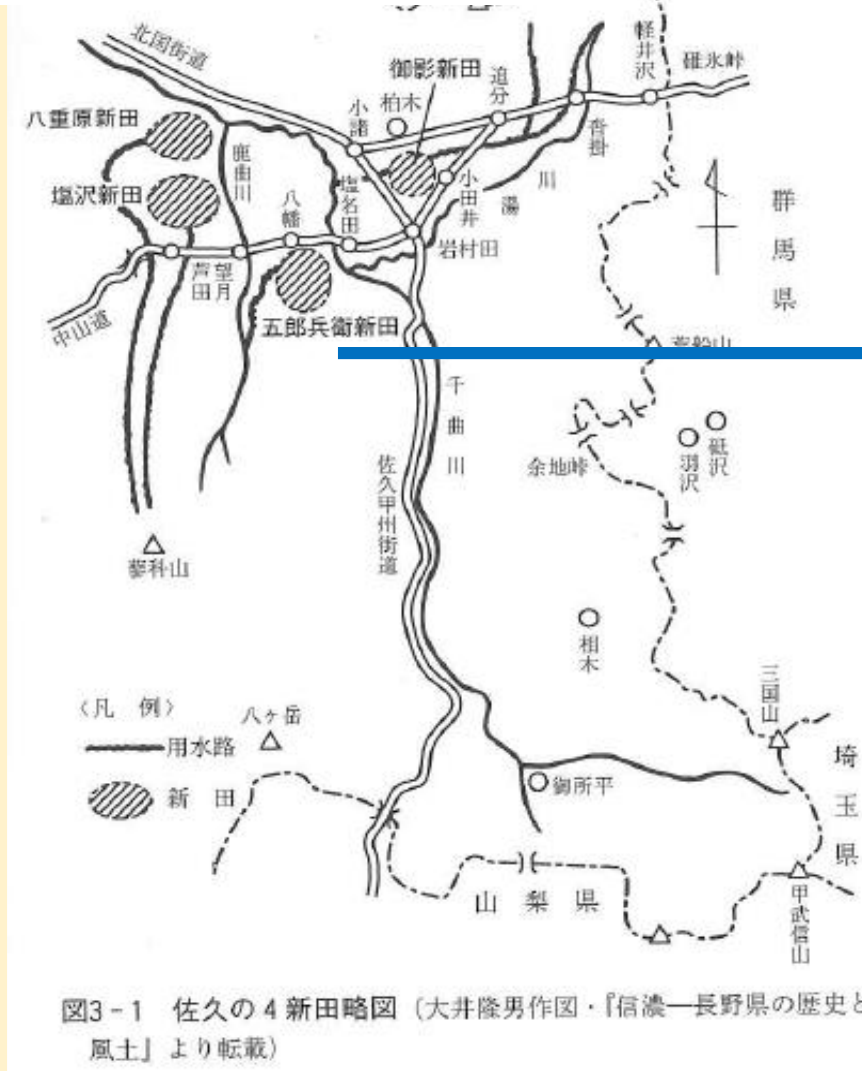


荻原井泉水句碑

宮澤康造「佐久の文学碑」より

3. 困難を極めていた用水事情

3.1 近世(江戸時代)の用水



(1) 宇山堰

江戸時代開発当初のままの用水施設

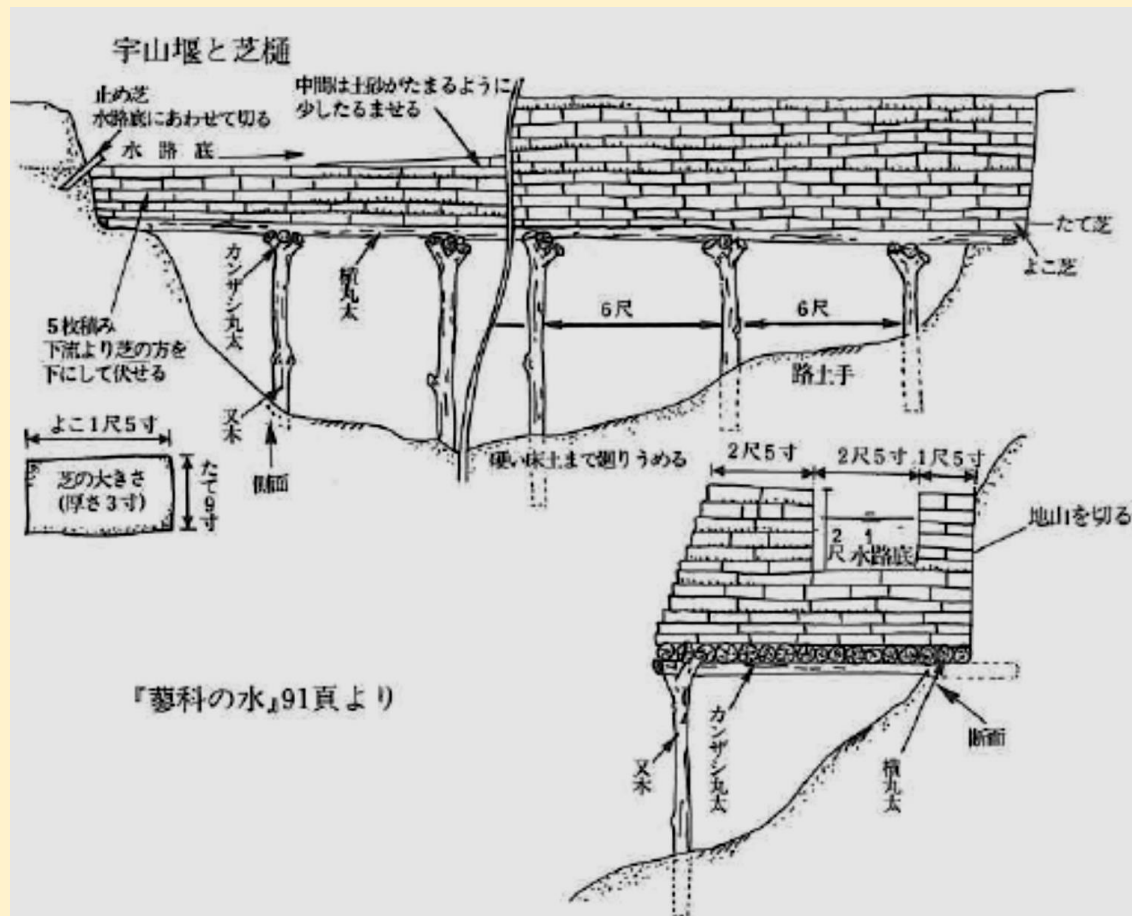


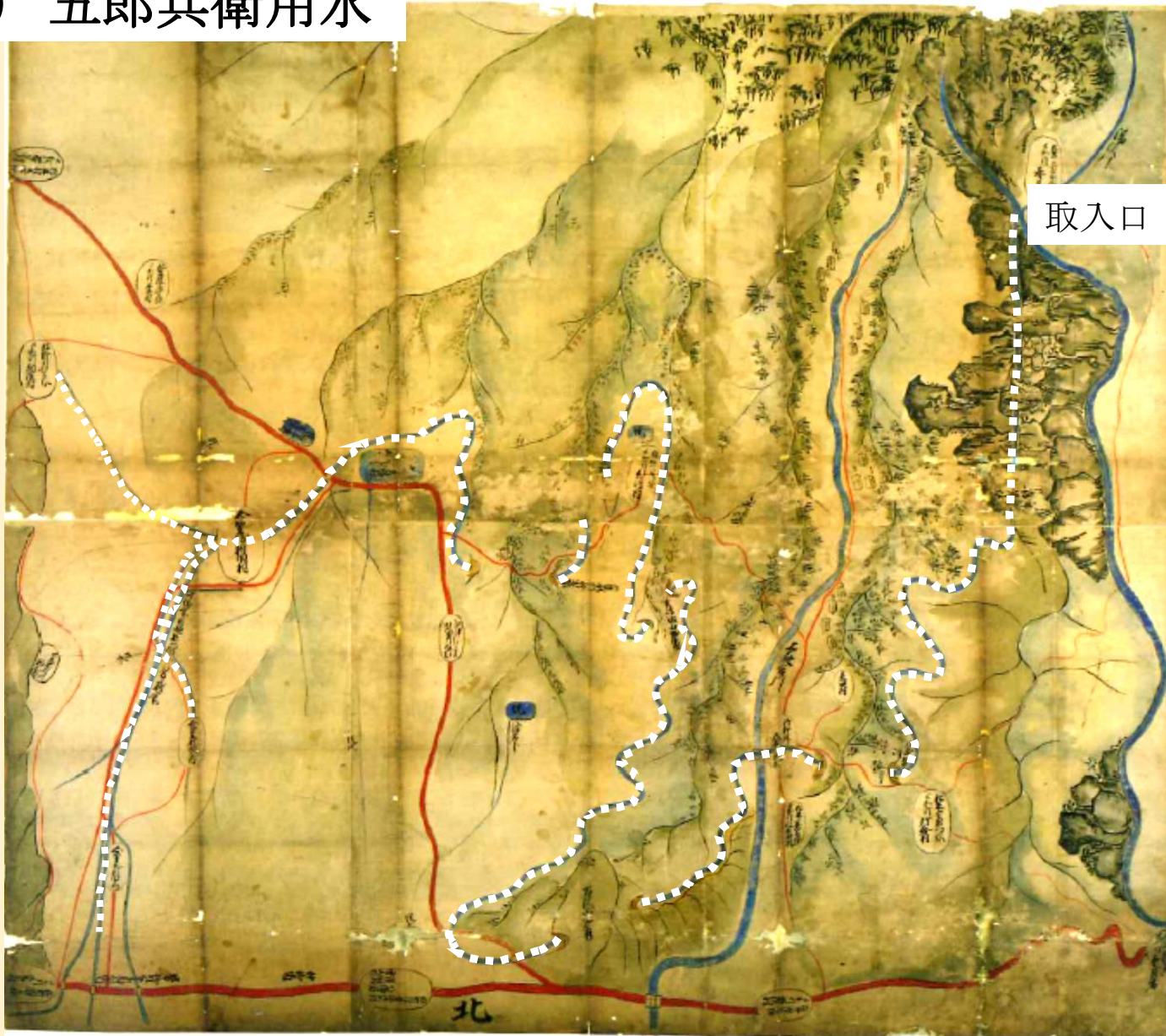
図1 芝樋の構造 (『夢科の水』91Pより)



急な斜面に用水を流すための芝樋(昭和27年ごろ)

立科町誌より

(2) 五郎兵衛用水



昭和40年代後半でも五郎兵衛用水は、江戸初期に完成した全長約20kmの用水施設のまま、堀貫(トンネル)・掛樋を使い、旧御他領9ヶ村の地域を通して五郎兵衛新田まで用水を運んでいました。

改修計画は、沿線地域からの反対運動が激しく、着手ができませんでした。

正徳2年(1712)頃の五郎兵衛用水絵図

用水改良工事により、この部分に水が
こなくなってしまう。



五郎兵衛用水の新旧

4. 技術・難度から国営事業レベルを長野県が解決した。

4.1 改修以前の五郎兵衛用水

土樋(つちどい)

低地に土を盛ることで水路の高さを維持した。その上の溝を堀ったところを用水が流れていた。

写真は昭和31年頃 碓氷高氏撮影

市川五郎兵衛の墓(遠科村) 五郎兵衛は、佐久の浅科村・望月町・北御牧村・小諸市・佐久市の一部までも潤す近代的水の元を築いた。

改修工事以前の五郎兵衛用水



や研究物の発行も行なっている。
五郎兵衛用水は、江戸時代初頭の寛永年間(一六二四―四四)に、市川五郎兵衛真親が中心となり、私財を投じて築いた用水である。それまで用水の便がなく開墾できなかった矢島原の広大な荒地に用水を引き、今日の美田地帯に変えたのが、市川五郎兵衛であり、五郎兵衛用水である。
用水は遠く遠科山中に源水を求め、断崖にトンネルを穿ち、段差の多い平地には「土樋」(土をもつてせきを通す)を築くなど、当時の高度な土木技術を使役して建設され、総延長二〇キロにも及ぶ水路が完成した。完成までには足かけ四五年を要した大工事であった。
この大規模な用水開墾の方式や技術は、佐久における近世初頭の新田開発の先駆けとなるとともに、他地域の新田開発にも大きな影響を与えたといわれる。昭和の大改修工事によって近代的水に生まれ変わった五郎兵衛用水は、現在では浅科村だけでなく、望月町・北御牧村・小諸市・佐久市の一部までも潤す重要な用水となっている。
(清水岩夫)

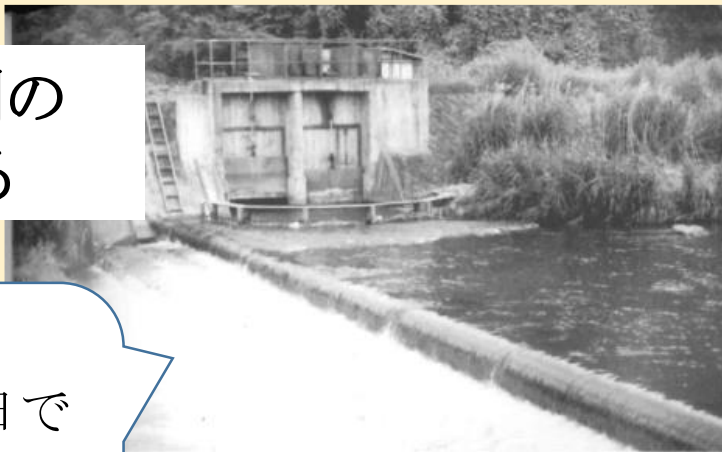
4. 2 御牧ヶ原農業水利の 改良事業が始まる

五郎兵衛用水のラバー堰堤

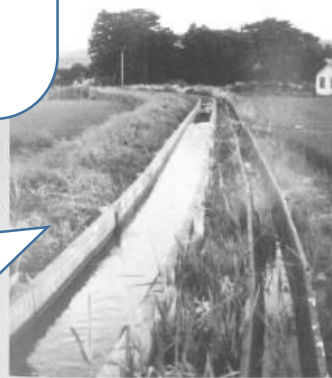
鹿曲川の水を望月地区春日で塞ぎ止め、新しいトンネルとサイフォンによって、水は浅科地区や御牧ヶ原へ導かれている。

改修された中原付近の 五郎兵衛用水

土を盛ってその上に溝を掘り造られていた用水は、コンクリートになって水漏れはなくなった。



五郎兵衛用水のラバー堰堤（望月町） 鹿曲川の水を望月町春日で塞ぎ止め、新しいトンネルとサイフォンによって、水は浅科村や御牧ヶ原へ導かれている。



改修された中原付近の五郎兵衛用水（浅科村） 土を盛ってその上に溝を掘り造られていた用水は、コンクリートになって水漏れはなくなった。

昭和
36年

1961

何本もの古い用水を統合、御牧ヶ原へ蓼科山の水がくるよう

御牧ヶ原農業水利の改良事業が始まる

肥沃でも水田には適さなかった川西地方は、水利改良により新たな土地利用の道が開けた。

昭和三十六年、蓼科山北麓一帯に広がる川西地方（立科町・望月町・浅科村・北御牧村）の用水の改良事業が始まった。川西地方は御牧ヶ原や八重原など台地状の地形が多く、そこを流れる千曲川や鹿曲川は深い谷の底を流れているために、人びとは蓼科山に水源を求めて長い用水路を造って水田を開いてきた。とくに御牧ヶ原は平安時代に御牧として利用されていたことから分かるように、地味は肥沃であったが、川がなかったので多くの灌漑を造って稲を栽培していた。長い間の水不足を解消するために昭和二十九年（一九五四）、御牧ヶ原北蓼科総合開発期成同盟が発足した。この同盟は蓼科山北麓の湧出水を使っている五郎兵衛用水、宇山堰、八重原堰、塩沢堰を統合改修して漏水を防ぎ、貯水池を築造してその余水を御牧ヶ原台地に導水することをめざしていた。

長い間の水不足を解消するため、昭和29年(1954)御牧ヶ原北蓼科総合開発期成同盟が発足した。この同盟は蓼科山北麓の湧出水を使っている五郎兵衛用水、宇山堰、八重原堰、塩沢堰を統合改修して漏水を防ぎ、貯水池を増築してその余水を御牧ヶ原台地に導入することをめざしていた。

立川の分水口(立科町)

蓼科北麓の水は、新しい水路で立科町へ下り、分水口から水田へと導かれていく。

(望月町) 立科町の切掛分水
和川を渡り、御牧ヶ原の西斜面
に流れている。



御牧ヶ原へと登る用水(望月地区)
立科町の切掛分水から分かれた
用水は鹿曲川を渡り、御牧御牧ヶ
原へと流れている。日本最大の高
低差180m



立川の分水口(立科町) 蓼科北麓の水は新しい水路で立科町へ下
り、分水口から水田へと導かれていく。

昭和36年(1961)蓼科
山麓一帯に広がる川西
地方(立科町、望月地
区、浅科地区、北御牧
地区)の用水の改良工
事が始まった。

肥沃でも水田には適
さなかった川西地方は、
水利改良により新たな
土地利用の道が開けた。

蓼科山の西北麓の湿地には「赤沼溜池」
(現女神湖)が造られた。長さ三三〇計
の堰堤を築き、満水面積一〇一、総貯水
量約三二万立方計の貯水池ができあがっ
た。

蓼科山の西の湧水は樽ヶ沢から、立科
第一号幹線を下り、本沢と唐沢の水を集
めて第二号幹線で芦田川へ集めた。その水
は切掛分水で二分され、北流は八重原台
地へ、東流はサイホンで鹿曲川を渡って
御牧ヶ原へ揚げた。

一方、五郎兵衛用水は春日の取入口を
改良し、取水した水はトンネルとサイホ
ンで浅科村へ送られ、余った水をポンプ
アップして御牧ヶ原へ導いた。

県営御牧ヶ原農業水利改良事業は、昭
和四七年三月に約一三億三、〇〇〇万円
余の事業費を投じて完成した。工事には
「ラバー堰堤」の頭目工や六、に及ぶサ
イホンなど、近代的農業技術が使われて
いる。

地味は肥沃であったが、水利が悪かつ
たばかりに森林や草地となり、天水を溜
池に集めてせまい水田に稲を栽培してい
た御牧ヶ原台地は、蓼科山の水が揚げら
れたことによって新たな土地利用への道
が開かれた。

(小林 悠)

(1) 改良事業後 赤沼ため池(女神湖)

8

赤沼ため池(女神湖)



MAP
E-5

【所 在】立科町芦田

【築 造】昭和41年(1966年)

【管理者】北佐久郡川西土地改良区連合

かつて赤沼と呼ばれた湿原に塩沢堰の余水を利用してため池を造ろうと、昭和17年に造成工事が始まりましたが、地質の不良のため未完のまま終戦を迎えました。その後、食糧増産への機運が高まり、昭和37年に工事再開、昭和41年に完成しました。この恵水は、立科から八重原の地域、さらには御牧原台地の農地へと行き渡っています。また、白樺高原の中心的な湖として観光客が絶えません。



赤沼と呼ばれた湿原に、昭和41年に女神湖が完成し、立科から八重原の地域、さらには御牧ヶ原台地へ水が行き渡っています。

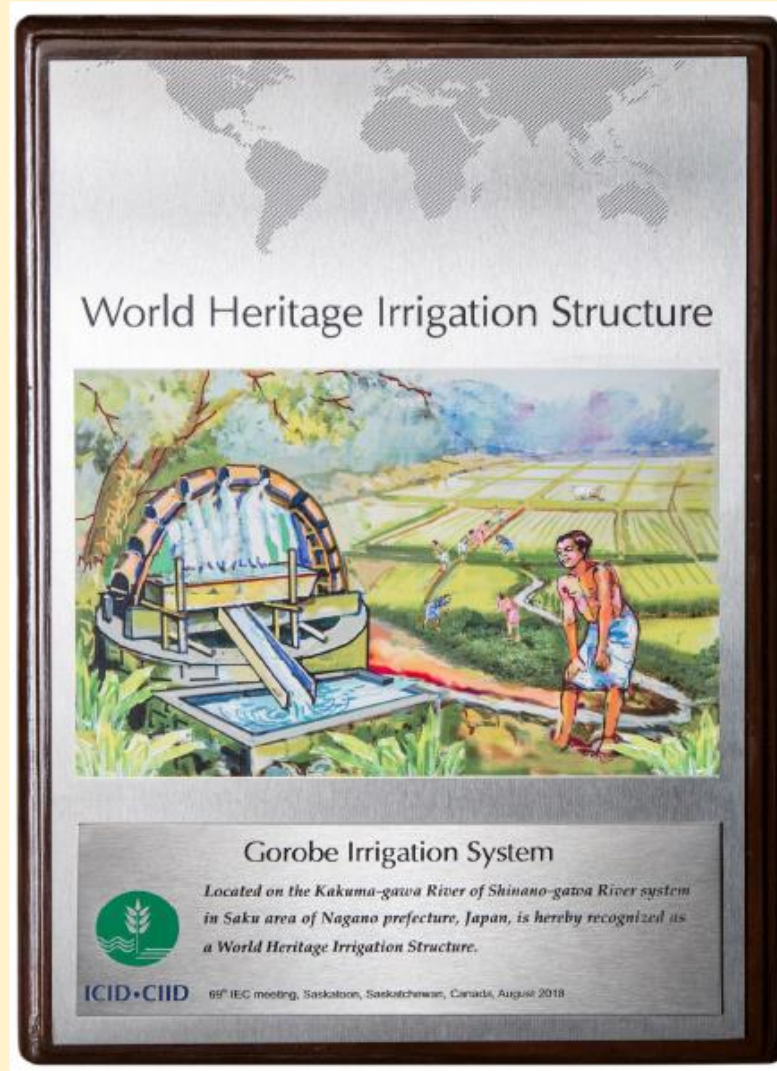
(2) 改良事業後 明神池



老朽化していた溜池を近代的な明神池に改修した。周辺は「芸術むら公園」になっています。貯水量は約14.7万トン、かんがい面積約173ヘクタールの農業用ため池です。八重原土地改良区で管理されています。

「明神池」東御市市民課より

5. 五郎兵衛用水開発研究の最高権威者が生涯の友



個人崇拜のための研究はいけませんが、中澤周三の精神であつた。

6. 佐久市立国保浅間総合病院を吉澤国雄名誉院長と協力して発足させ、現在の発展に結びつける。



写142 旧浅間病院（昭和34年）
（佐久市立浅間総合病院『開院15周年記念誌』所収）

佐久市志より

7. 佐久総合病院設立の人材育成

円心会は、五郎兵衛翁の精神を継承した農村の青年達の会である。その中心人物は、中澤始・内堀忠利・伊藤一明・中澤周三・高野貞吉らであった。

～瀬下武松伝 安岡人間学の証言 老農の坂より～

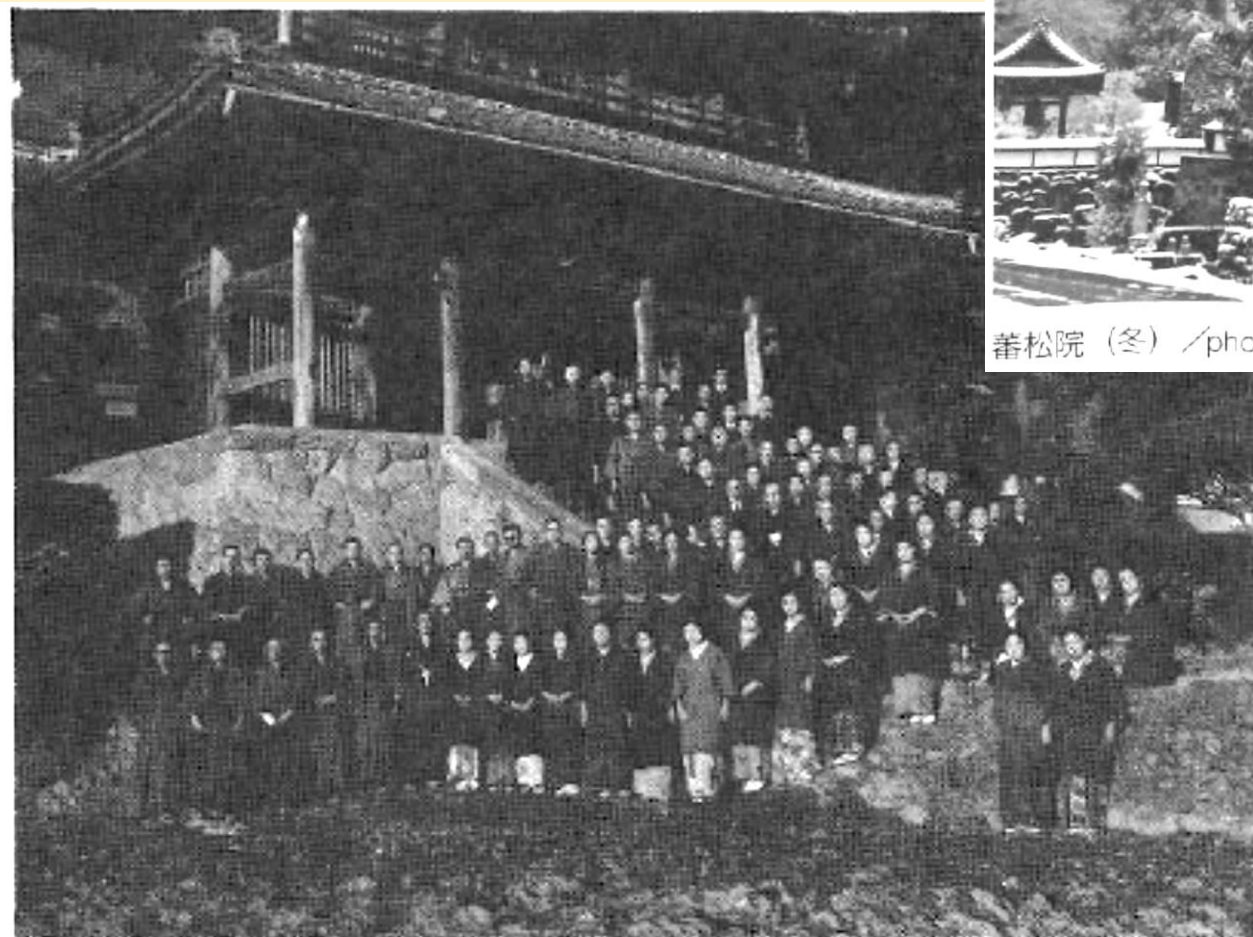
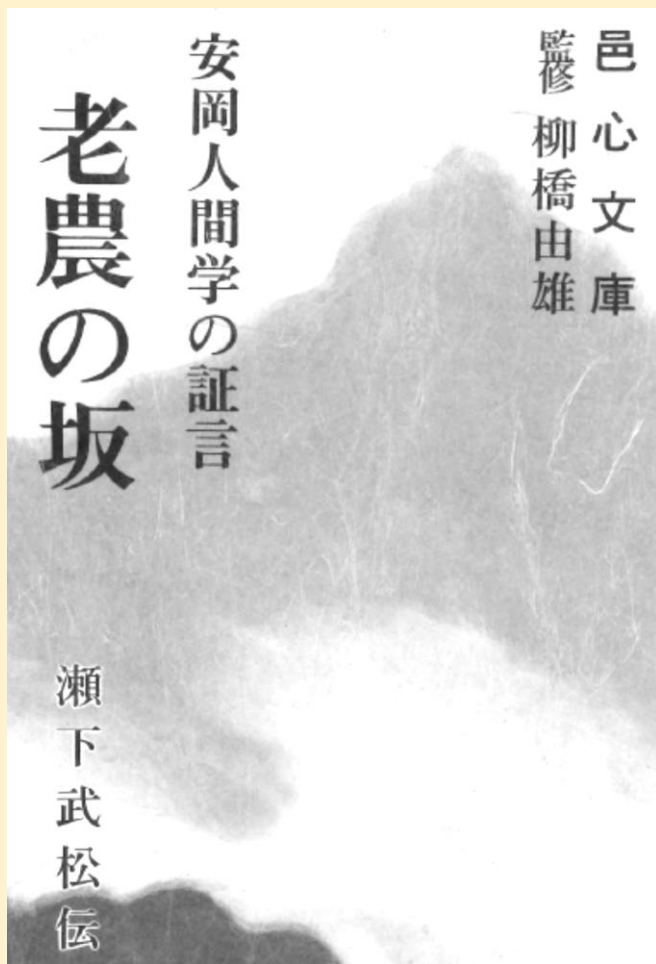
安岡正篤に学んだ瀬下武松・菅原兵治がいる。



書見をする安岡正篤

瀬下武松伝 安岡人間学の証言 老農の坂より

瀬下武松は蕃松院で田口村塾を開き、その中から佐久総合病院の創設に尽力する人物を育成している。



蕃松院にて 塾生とともに



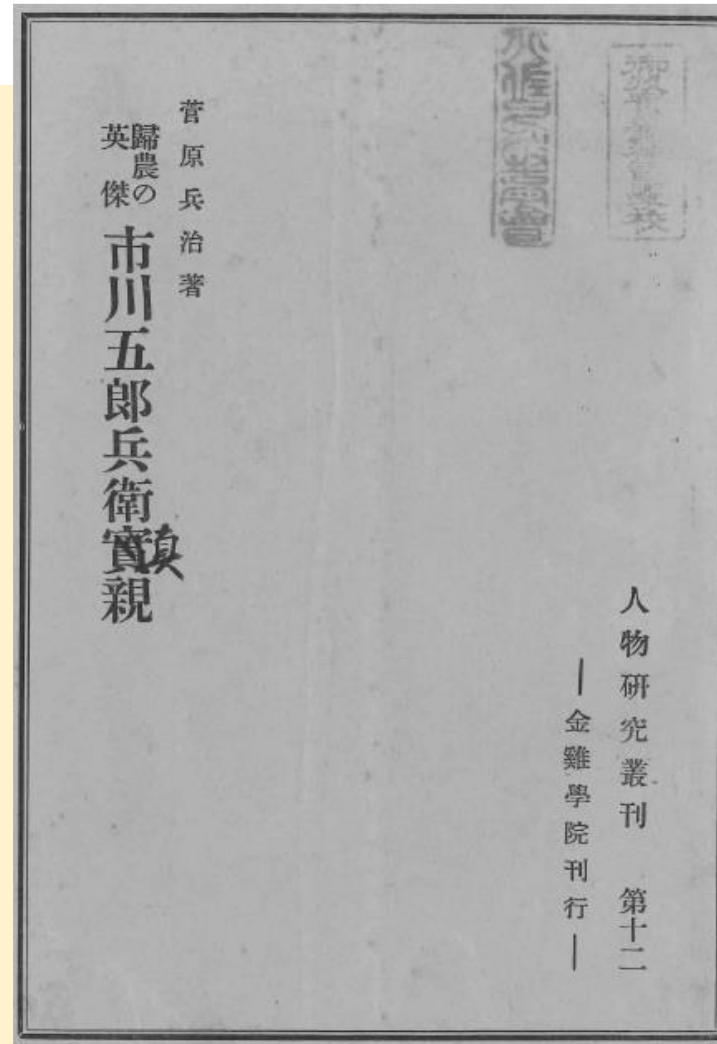
佐久市観光協会
パンフレットより

瀬下武松伝

「安岡人間学の証言 老農の坂」

瀬下武松伝「安岡人間学の証言 老農の坂」より

菅原兵治は「帰農の英傑」で市川五郎兵衛を
世に知らしめた。



菅原兵治著「帰農の英傑 市川五郎兵衛真親」
-金雞学院刊行-

完